

一杯を大事に大事に飲んでゐる隣の男良き隣人だ

高山邦男

飲み屋ではどんな人と隣り合わせるかで気分がずいぶんちがう。酒と対話するように飲んでいる男。四句切れで、独立した結句を口語で決めて独特な調べを現出した。

蛾の名前シンジュサンなり南島で晋樹さんのこと思ひ出すなり

俵万智

調べてみると、「シンジュサン」なる蛾は本当に存在する。「マイペディア」によれば、羽を開くと十三センチもの大きな蛾で、沖縄のヨナクニサンを除けば、日本最大の蛾なんだそうである。日常生活の中の小さな発見の楽しさ。

大輪の光放ちつつ太陽昇る神の島なる久高の島に

安仁屋洋子

「てだ」という沖縄の言葉がポイントになつてゐる一

首。久高島は沖縄本島東南の知念岬の近くの細長い小さな島で、周囲八キロ、人口二百人ほどだという。琉球王朝時代から神聖な神の島とされており、この島に昇る「てだ」は特別なのだ。

百歳の正月の日の母の声いかなる艶をおぶるか待たるる

伊藤一彦

母の長寿を讃える歌。近年は介護の歌が多くこのよう念である。作者の母上は、たしか私の母と同じく大正三年生まれ。今年の誕生日で満百歳を迎えるはず。ご

健勝を祈る。

風花のなかをかけ来る子がひとりみるみるうちに老

婆となりぬ

美帆シボ

今月の宇都宮とよ「選者の言葉」に、「低音のアリアのようにしみじみと淋しいが美しい」とある。いい読みだと思う。この一首、女性の一生をシンボリックにうたつた作とも読め、そう読むと、少女から老婆へ、またくまに過ぎる時間の感覚がなんともさびしい。

授業中見知らぬ生徒がやつて来てマサトを出せと椅子を蹴りたり

柴山与志朗

今月の六首、勤務先の中学校に他の中学の生徒五人が殴り込みをかけてきた教室の歌。まるで劇画の中のきごとのようで驚くばかりだが、現実なのだろう。作者は殴り込まれた側の教師。掲出歌、結句がうまい。結句だけで乱入者の暴れぐあいが想像できる。

光る星光らざる星数多降る生き生かさる人の眼

山口和賀子

やや言葉が先行している感じはあるものの、星がそうであるように、なるほど人間も能動的生活方と受動的な生き方があるな、そう読者を納得させるところがある。「眠りに……星が降る」という文脈にもう少し工夫があつてほしかったが。

庭に蝶飛んでむすめが追掛けでどこに不満があるの

堤幸子

平和で幸福な日常に退屈し倦怠をおぼえている、下句